



## 第67回米国肝臓学会議(AASLD2016)

丸山 紀史

千葉大学大学院医学研究院消化器内科学講師

67回を迎えたAASLDは、2016年11月11日から15日までボストン(米国、マサチューセッツ州)のJohn B. Hynes Veterans Memorial Convention Centerにて開催された。本学会は毎年10月から11月に開かれ、ここボストンはその会場として定番である。ときにワシントンDCやサンフランシスコで行われることもあるが、アカデミックな雰囲気が街に根付いたボストンを訪れると気持ちも引き締まる。

11日と12日は、Special Interest Group ProgramとPostgraduate Courseで構成されていた。11日の“Cholangiocyte/Mesenchymal Interactions in Biliary Diseases: Mechanisms and Emerging Therapeutic Strategies”と題したワークショップでは、原発性硬化性胆管炎モデルとしてMdr2ノックアウトマウスを用いた研究が報告された。特に、原発性硬化性胆管炎と腸内細菌との関連、FXR作動薬、インテグリン阻害薬などの臨床試験についての話題が注目を集めた。

12日のBasic Science Symposium“Liver Immunology”では、抗PD-1抗体、抗CTLA-4抗体など癌免疫療法への高い注目度を反映して多くの聴衆が出席していた。講演では、マクロファージやクッパー細胞、Th17細胞など肝臓を構成する細胞別の基礎的な内容や、C型慢性肝炎、非アルコール性脂肪肝炎(NASH)、肝細胞癌など疾患別でのトピックが報告された。National Cancer InstituteのTim F. Greten先生からは、肝細胞癌に対するラジオ波焼灼療法と抗CTLA-4抗体による併用治療の第I/II相試験が紹介され、多くの質疑応答があった。

13日の午前に開催されたThomas E. Starzl Transplant Surgery State-of-the-Art Lectureでは、“Zen and the Art of Liver Transplantation Quality”と題して、Oregon

Health & Science UniversityのSusan L. Orloff教授が、豊富な経験と治療成績に関する最近のデータを提示した。広い会場ではあったが席の大半は埋まっており、参加者の興味の高さがうかがわれた。

ポスター会場では、Late breakingの演題が聴衆の目を引いた。特にGenotype 2, 4, 5, 6に対するDAA



写真1 ポスター会場入口での撮影

千葉大学消化器内科教室からの参加者

[左から中村昌人特任助教、丸山紀史(筆者)、横須賀收名誉教授、小笠原定久特任助教]